

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04198

研究課題名（和文）スクールソーシャルワーク実践スタンダードの活用とその効果評価に関する研究

研究課題名（英文）Utilization and evaluation of the Standards for School Social Work Practice

研究代表者

馬場 幸子（BAMBA, Sachiko）

関西学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：60646818

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「スクールソーシャルワーク実践スタンダード」（「スタンダード」）の効果検証を行った。また、「スタンダード」普及のため、解説書を出版した。

「スタンダード」を用いることでスクールソーシャルワーカー（SSWr）は、自らの実践について気づきと課題意識を高めた。また、継続的に「スタンダード」の学習会に参加した複数の中堅・ベテランSSWrが「スタンダード」に実践上の“指針”や“軸”としての意義を見出した。「スタンダード」の活用を通して[課題の意識化]や[基盤の構築・再確認]がなされ、他者に対して自信を持った説明や伝達ができるようになったり、関係者間での認識や目標の共有が可能となったりしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、スクールソーシャルワーカー（SSWr）の社会的認知とSSWrに対する期待は高まっている。しかし、実践の拠り所となるもの（SSWrに共通の規範や指針）のない不安定さを感じつつ実践をしているSSWrが少なくない。本研究では、「スクールソーシャルワーク実践スタンダード」（「スタンダード」）を活用することで、SSWrらが自らの実践上の課題を明確にし、また、「スタンダード」に書かれている事柄を意識しながら研鑽を積むことで、自信をもって実践できるようになるなど、「スタンダード」がSSWrの専門性向上に貢献する可能性があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study evaluated the effectiveness of the utilization of the Standards for School Social Work Practice. Also, a guidebook of the Standards was published for the purpose of dissemination of the Standards.

School social workers increased their awareness about tasks on their practice by using the Standards. In addition, the study revealed that, for some of mid-level and experienced school social workers who regularly participated in the Standards Workshops, Standards served as guidelines and/or backbones of their practice. Some recognized their tasks, and develop/re-develop their foundation of their practice through using the Standards, so that they were able to explain or tell something with confidence. A school social worker increased her understanding of their roles by using the Standards, and it allowed her to work with staff of related agencies to develop common understanding and common goals.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：スクールソーシャルワーク 実践スタンダード 効果評価

## 1. 研究開始当初の背景

米国では、1976年に全米ソーシャルワーカー協会(NASW)がスクールソーシャルワーク(以下、SSW)サービスに関するスタンダードを作成した。2012年にはその最新版が発行され、スクールソーシャルワーカー(以下、SSWr)に包括的な指針を与えている。また、関連する研究論文も多数発行され、SSWに関する政策に反映されている。加えて、NASWのスタンダードを基準にし、各州や市でも独自のスタンダードを策定・利用して、SSWrの実践を支えている。

一方日本では、全国のSSWrが共通に満たすべき基準を包括的に示したものは存在しない。1999年に日本スクールソーシャルワーク協会、2006年に学校ソーシャルワーク学会が設立され、それぞれ研修事業などを展開するとともに、入門書等を刊行している。また、2009年には日本社会福祉士養成校協会がスクール(学校)ソーシャルワーク教育課程認定事業を創設、2016年現在41の認定機関が存在する。しかし、認定を受けてSSWrとして活動している者はごくわずかであり、多くの自治体ではソーシャルワークの専門的知識・技術を持たない者がSSWrとして採用され活動していた。全国のSSWrが共通に満たすべき基準(スタンダード)を明確に定め、SSWrの雇用条件改善及び専門性の向上を図らなければ、予算を計上し人員を増やしても、効果的なSSW実践の展開は期待できない。

この状況に危機感を抱いた研究代表者が、連携研究者らとともに2013年度以降「日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダードの開発的研究」を行ってきた。初年度は米国のSSW実践スタンダードに関する情報を収集、全米スクールソーシャルワーカー協会(SSWAA)の年次大会で、スタンダードに関する意識調査(質問紙調査およびグループインタビュー)を実施した。その結果を基に、2014年度以降、日本のSSWrらを対象に「SSWスタンダード学習会」を実施してきた。3地域に分けて行った第1回学習会にはSSWrを中心に学校教員等も含め合計87名の参加者を得た。第1回学習会ではSSW実践スタンダードについてのニーズ調査を行った。2015年4月から2016年9月まで、研究代表者の所属大学において10回にわたり開催した学習会(第2回～第11回)には、毎回20-30人程度の参加者を得た。第1回からの通算で参加者は延べ300人を超えた。さらに、学習会を東京以外でも開催してほしいとの要望を受け、2016年6月から10月には愛知県社会福祉士の主催で、上述学習会のダイジェスト版を4回連続講座として実施した。これら一連の学習会でのディスカッション記録を参考に、2017年2月に「スクールソーシャルワーク実践スタンダード」(試用版)を完成させた。「スタンダード」の目的は、「SSWrがそれを活用することで、効果的に仕事をするために必要な価値、知識、技術、感受性に関する意識を高めること」である。

## 2. 研究の目的

研究代表者らは、SSWrが共通に満たすべき基準およびSSWrの活動指針となるものが必要であると考え、「スクールソーシャルワーク実践スタンダード」(以下、「スタンダード」)を開発した。SSWrが「スタンダード」の内容と役割を理解し、「スタンダード」を定期的に読み返し、また、迷った時に立ち返る場として利用することで、SSWrが自信を持って活動できるようになり、SSWrによる支援の質が向上することを目指している。それゆえ、本研究では、「スタンダード」の活用効果を検証することと、「スタンダード」を普及させることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 効果検証方法の探索(2017年度)

本研究に先行して行われた2016年度「スタンダード学習会」に参加した人のいる自治体に、「スタンダード」の冊子とともにアンケート用紙を郵送し、「スタンダード」を活用した感想を尋ねた。合計10自治体59人より回答を得た。しかしながら、冊子を十分読まずに回答した人も多く、意図した効果検証にならないと判断、この方法での調査は打ち切りとした。

次に、研究代表者の所属大学内で、年間4回、「スタンダード」を用いた学習会を開催した。1回目は「スタンダード」の内容と評価票の用い方を学び、2回目以降は「スタンダード」を用いた事例検討を行った。年間で延べ100人以上の参加者を得た。加えて、複数の自治体およびスクールソーシャルワーカーらの会合(大阪と神奈川)で「スタンダード」を用いた実践の振り返りまたは事例検討の形で研修会を実施した。その都度感想等のアンケートを実施した。2つの自治体では、スーパービジョンにおいて年間通じて「スタンダード」を活用し、各自の実践や自治体事業としての目標設定および振り返りを行った。

### (2) 効果検証(2018年度～)

2018年度に年6回の継続的な学習会を行った。第1回学習会では、研究代表者が「スタンダード」の説明を行った後、参加者に、スタンダードの内容に沿った形で当該年度の実践目標を設定してもらった。また、学習会の感想等に関するアンケートも実施した。第2回以降は、前半に「アセスメント」「多様性の尊重」などテーマを設定して講義を行った後、後半に各自に実践の振り返りをしてもらった。前回記述した目標をどの程度達成できたか、今後の課題は何かなどを記述してもらった。また、小グループに分かれて各自の記述内容を共有し、情報交換および互いにエンパワメントしあう場とした。第1回学習会参加者は48名、その内SSWrは45名であった。第2回は午前中に同一会場でSSW関係の他の研修会があったため、その参加者も合流し、学習会に70名を超える参加者を得たが、第3回以降は、20～30名が継続的に参加した。

## 効果検証

第1回学習会で参加者が作成した実践目標及びアンケートの回答から、「スタンダード」を用いた学習会を行うことで、SSWrの気づきや課題意識が増すのか、どのような課題意識を持つのか、課題意識はSSWrとしての経験の長さによって異なるのか」を明らかにした。

## 効果検証

2019年2月～3月（第5回学習会と第6回学習会の間）に、グループインタビューを行った。対象者は、学習会に継続的に参加した中堅からベテランにかけて（経験年数3年～8年）のSSWr8名（4人×2グループ）。継続的に学習会に参加したSSWrが、「スタンダード」をどのように活用したのか、また、それによってどのような成果や効果があったのかを明らかにした。

### （3）「スタンダード」の普及

研究代表者が主催する学習会以外の場においても「スタンダード」が活用されてはじめて「スタンダード」の普及が実現する。だが、「スタンダード」の冊子があるだけではSSWrらはそれを使いこなせないことが明らかとなり、「スタンダード」の解説書を作成することとなった。

## 4. 研究成果

### （1）2017年度の成果

2017年度に行ったどの研修会も、おおむね好評で、「スタンダード」を活用することで、「実践をふり返ることができた」「新たな気づきがあった」「SSWrの活動を俯瞰的にみることができた」等の意見を得た。「スタンダード」の中身は分かっている前提で事例検討等を行ったときよりも「スタンダード」の中身を詳しく説明した後でディスカッションをしたり、事例検討をしたときのほうが、参加者の理解度や満足度は格段高かったという印象である。しかしこの時期はまだ、研修会の内容や効果検証の方法を試行錯誤している段階であった。特に、「スタンダード」を基にした評価票については、参加者の反応から、改良の必要性があるとの判断に至った。

### （2）効果検証の成果

#### 「スタンダード」を用いた学習会によるSSWrへの気づきと課題意識の促進

学習会では、大多数の参加者が自らの実践への気づきを得、課題意識を高めて、当該年度の実践目標を立てることができていた。また、参加者全員が、「スタンダードの内容」が気づきを得るのに役立ったと回答していた。参加者らが立てた実践目標は、価値や倫理に関連する知識や意識の向上、アセスメントや支援の実施に関するスキルアップのほか、「児童生徒に寄り添い、児童生徒（が）自分の思いや気持ちを表明できるように（支援する）」など、共感性や感受性にかかわると読み取れるものを含め、様々あった。このことから、「スタンダード」を活用することで、「効果的に仕事をするために必要な価値、知識、技術、感受性に関する意識を高める」という、「スタンダード」本来の目的が達成され得ることも示すことができた。

表1：学習会の満足度と気づきの有無・気づきの促進要因

満足度	気づき		気づきを得るのに何が役立ったか				
大変満足	20	たくさんあった	27	スタンダードの内容	ディスカッション・共有		
満足	18	あった	14	よく当てはまる	23	よく当てはまる	27
ふつう	3	無記入	2	当てはまる	20	当てはまる	15
不満	1*					どちらとも言えない	1
無記入	1						

\*自由記述の内容から、誤記入（正しくは大変満足）と思われる

また、ほぼすべての参加者が、気づきを得るのにディスカッションが役に立ったと回答したことから、「スタンダード」を用いた学習に参加者同士のディスカッションを取り入れることで、一層気づきが高まる可能性が示唆された。グループディスカッション（ピア・スーパービジョン）を通して「気づき」を高めることで実践力の向上を目指す方法は、スーパービジョン体制が整っていない介護領域において採用され、効果を上げている（渡部、2007）。「気づきを得る」「自己覚知する」ことは、ソーシャルワーカーとしての専門性を向上させるのに不可欠な要素である。

加えて、スーパービジョンの機能の一つに「教育的機能」があり、教育的機能の重要な要素の一つが「援助者の学習の動機づけを高めること」である（植田、2005）。つまり、スーパービジョンの役割は、ソーシャルワーカーが自らの実践について課題意識を持ち、研鑽していく姿勢を促すことでもある。スーパービジョン体制の整っていないSSW領域において、本学習会がスーパービジョンの役割の一部を担うことができる可能性を見出した。

#### 養成課程で「スタンダード」を学ぶ必要性

第1回学習会の参加者の半数以上が経験年数2年未満の新人SSWrであった。彼らからは、SSWrの役割についての理解やアセスメントの方法などSSWrとしての基本技能の習得に関する課題が強く表出された。例えば、「スタンダード」の<Standard4：専門性の発揮>には[SSWrは、率先してSSWの役割についての理解を広めつつ、ソーシャルワーク実践の展開を促進します][SSWは、実践過程において、目標達成のために自らが行うべきことを省察し、周囲の人々に働きかけ

つつ、自ら率先して動きます]と書かれている。しかし、新人 SSWr の多くが、広めるべき内容を理解できていない、自らがすべき事柄や他者に働きかけるべき内容を理解できていないということであった。日本では SSWr に採用されて初めて SSWr の役割を学ぶ者も少なくないようであるが、日本でも米国と同様「スタンダード」を養成課程で伝え、実践の場に出た時には既にそれが“内在化”している状態でなければ、SSW 実践の質の担保は難しいであろう。

#### 課題意識の経年変化に対応可能な研修システム構築の必要性

本研究では SSWr としての経験が進むにつれ、視点が変わっていく様子をとらえることができた。新人の間は、自らの意識や知識の向上に意識が向いており、中堅になると、他者への説明や他者への働きかけを効果的にできるようになりたいと考え、さらに経験年数が増えると、体制整備や新人の育成へと意識が向いてきていた。また、本研究では、新人 SSWr ほど子どもに寄り添う“想い”を重視しているように見受けられた。一方、中堅以降の SSWr は実践の質（根拠のある実践・評価）に対する意識の表れが多く文章に出ていた。SSWr は子どもに寄り添う、子どもの権利を擁護するという価値観を根本に持っている必要がある。したがって、SSWr になろうとする者に対してはまず SSWr としての価値・倫理をしっかりと理解するための学びが必要である。しかし“想い”だけでは専門職としての仕事にならない。“想い”を具現化する知識と技術が必要である。それは、連携についてもいえる。関係者と効果的な連携をするためには良い人間関係が重要である。しかし、連携には知識と技術も必要である。地域のネットワークを構築し、活用する方策を持たなければならない。

関連して、SSWr は根拠のある実践ができるようになる必要がある。根拠のある実践のためには客観的なデータの使用が必要であり、「なぜこの方法をとったのか」を説明できる必要がある。それを可能にするための学びの機会・学びの場は、全国ほとんどの SSWr にとって皆無である。また、相当数の自治体において、SSW は3年もすれば中堅、5年を過ぎればベテランとしての役割を担わざるを得ない状況にある。しかし、中堅以上の SSWr にモデルを示すことのできるベテラン SSWr が自治体にいないことも少なくない。SSWr が段階に応じた力をつけていくことのできる研修システムの構築が早急に求められる。

### (3) 効果検証 の成果

#### 「スタンダード」利用のきっかけと背景

参加者らは[学校や保護者の思いに巻き込まれやすい]仕事に流される]といったことから、【SSWr の役割を見失う危険性】を有していた。“巻き込まれて”しまう要因がある参加者は自分の“芯のなさ”としてとらえ、自分の芯がないと、学校の要望、親御さんが言ったこと、すべてを適えようとして...自分がふらついて しまう」と述べていた。また別の SSWr は、関係機関や学校との関係形成がうまくいかず、[立ち止まってしまう]つまり、支援が立ち行かなくなり、SSWr としての【役割遂行の困難】に陥るとのことであった。さらに、【経験則の限界】を感じている SSWr もおり、加えて、異なる経歴を持った SSWr がそれぞれ自分の経験に基づいて発言・行動することで同僚 SSWr との [コンセンサスの不成立] 状態にあったり、学校では、校内 [チーム支援体制構築の困難]を感じたりしている SSWr もいた。そういった事柄に対する危機感が「スタンダード」の学習会への参加動機となり、また、「スタンダード」利用のきっかけとなった。

#### 参加者が見出した「スタンダード」の意義

参加者らは、SSW について他者に説明をする、実践をふり返る、根拠のある実践を行う、倫理に基づいた実践をするなどの遂行上、「スタンダード」が【指針や軸となる】と感じていた。また、「スタンダード」を活用することで【価値・倫理への意識付けができる】、関係者間での【視点・目標の共有が可能となる】と考えていた。

一部の参加者らは、文部科学省が示している SSWr の職務内容は漠然としていてわかりにくく、「スタンダード」でその具体的な意味内容や方法が理解できると述べた。また、文部科学省の示したガイドライン（試案）は SSW について ざっくり説明 するのに必要なものだが、「スタンダード」は、パイブルみたいだと表現した者もいた。日本の SSWr には、核となるもの、軸になるものがない不安定さを感じつつ実践をしている者が少なくない。頼りになるスーパーバイザーが身近に存在しない中堅以上の SSWr にとって「スタンダード」が支えとなっていた。

#### 「スタンダード」の活用方法

「スタンダード」の活用は、【個人での活用】【自治体での活用】【SSWr 同士や関係者との活用】の3つがあり、個人としては、[業務の見直し・実践のふり返り][実践目標の設定][迷った際の確認]に活用されていた。自治体では、[上司からのヒアリング]や[学期ごとのふり返り][連絡会での他職種への説明]の際に「スタンダード」を用いていた。SSWr、スクールカウンセラー、教員が合同で行う連絡会では“SSWr が大事にしている事柄”を「スタンダード」を紹介しながら説明していた。同様に、自治体を超えて行われる SSWr 同士の研修会では「スタンダード」を用いて SSWr としての“原点”の確認を行ったり、多職種の関係者との間では、「スタンダード」を [SSW を伝えるツール]として用いたりしていた。

#### 「スタンダード」を活用したことでの変化と成果

最も多く語られたのは参加者個人の意識や態度に関する事柄であった。SSWr としての [役割理解] や [基盤の形成・再確認] [原点への立ち戻り] がなされ、[専門的自己の統制] が可能となった。また、自らの実践上の [課題の意識化] が進んだり、[頭の整理] や [実践目標の整理] ができることで、[体系的実践への意識形成] がなされた。象徴的であったのは、ある SSWr が語

った「これがコンサルテーションなんだと言葉にできた。感覚が言葉になったというか、(中略) 漠然とやっていたことが整理されて、1つの支援の流れとして今これをやっているんだと整理でき(た)」という言葉である。「スタンダード」の項目の1つに「コンサルテーション」がある。その文章を読み、学習会を通して理解を深め、概念や理論が自分の実践と結びついたのである。

加えて、内面での変化だけではなく、他者への発言に変化が生じたとの報告も複数上がった。「スタンダード」の活用によって、SSWrとしての立ち位置や、自らの判断、相手に対する要望等を自信をもって相手に説明や伝達ができるようになったとのことであった。

また、ある者は自治体内や関係者間での変化についても語った。アセスメントシートを活用していない自治体から参加していたAさんは、年度初めからアセスメントシートの作成・自治体への導入を目指していた。アセスメントシートを作成しそれを教員や関係機関の職員らと共有することで支援の方向性にも共通認識ができたと述べた。またAさんの所属自治体ではSSWr同士のミーティングが1年ほど中断していたが、学習会でのふり返り事項を共有することを通じて「ミーティングが復活した」とのことであった。また、アセスメントの際に確認すべき事柄を「スタンダード」で確認し、それを意識しながら関係者と情報を共有することで、ただずらずらとみんなと一緒に共有するのではなく、情報が少しシステマチックな感じに共有されるようになったと述べていた。さらに、「スタンダード」の活用が、「視点・目標の共有、連携の促進」などに役立ったと発言した。

#### 「スタンダード」の日常的な活用による効果

本研究の参加者らは、単に複数回学習会に参加しただけではなく、個人で日常的に、あるいは、同僚や上司、関係者と話をする際に「スタンダード」を用いていた。その例は、「スタンダード」のコピーをノートに貼って持ち歩く、カウンセラーにSSWについて説明をする際に参照する、仲間との話し合いの際に用いて認識を共有する等である。「スタンダード」が指針や軸となり、各々に“内在化”されるとするならば、それはSSWrらが「スタンダード」を日々目にし、活用することによってであろう。米国のある地域では「SSWの実習生が学校内の壁にスタンダードを書いて貼った」という。そしてその行為は他のSSWrから良いアイデアであると評価を受けていた。なぜならそれによって「日々の仕事の中で(スタンダードに)目を通し、自分のやっていることは、スタンダードに沿っているかを自らに問うことができるから」という(馬場・高石 2018:341)。

#### 「スタンダード」の継続的活用によるSSWr個人の成長と実践上の効果

今回、変化や成果に関する結果を【個人の中で】【他者に対して】【自治体内・関係者間で】の3つに分けて分析したが、それら変化や成果は別個に生じたものではない。互いに関連しており、また、【個人の中で】の変化や成長があつてこそ、【他者に対して】や【自治体内・関係者間で】の取り組みにおける成果・効果が表れたものと考えられる。例えばFさんの場合、“芯のなさ”等の課題を有していたが、「スタンダード」の継続的活用を通して「価値・倫理への意識付け」がなされ、【個人の中で】「課題の意識化」や「基盤の構築・再確認」がなされたことにより、【他者に対して】「自信を持った説明や伝達ができるようになった」Aさんの場合は、「スタンダード」の学習を通じて【個人の中で】得た(SSWrは)説明して関係機関の連携というものを作っていく役割なんだという「役割理解」があるからこそ、「アセスメントシートに基づく情報共有により、認識の共有ができた」り、共通のゴールを目指すなど【自治体内・関係者間で】の成果につながったものと推測する。

本研究は探索的研究の初期段階であり、対象者も限定的であるため、結果を一般化できる段階にはない。今後対象者を増やして研究を発展させていく予定である。また、学習会に参加することが「スタンダード」利用の条件である必要はない。学習会に参加せずとも、「スタンダード」を活用することで、専門性を高めることのできるSSWerや、体制整備を推進できる自治体が現れるのか、どのようにすればそれが可能かを見極めたい。

#### (4)「スタンダード」の普及について

これまでの学習会で研究代表者が行ってきた「スタンダード」の説明(講義)をまとめる形で、解説書である、『スクールソーシャルワーク実践スタンダード 実践の質を保証するためのガイドライン』(明石書店)を出版した。ここには、「スタンダード」の項目ごとの説明に加え、評価票の活用方法例も掲載した。本研究期間内に「スタンダード」を普及させるには至らなかったが、本書が、「スタンダード」の普及に役立つことを期待する。

#### 【文献】

馬場幸子・高石啓人(2018)『日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダード』の開発：研究者と実践者との共同開発プロセスに着目して、『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』69, 337-351.

植田寿之(2005)『対人援助のスーパービジョン：より良い援助関係を築くために』中央法規  
渡部律子(2007)『基礎から学ぶ気づきの事例検討会 スーパーバイザーがいなくても実践力は高められる』中央法規.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 馬場幸子 高石啓人	4. 巻 69
2. 論文標題 「日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダード」の開発：研究者と実践者との共同開発プロセスに着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 337-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 馬場幸子・望月彰・高石啓人・鈴木庸裕	4. 巻 14
2. 論文標題 スクールソーシャルワーク実践スタンダードを用いた学習会とスクールソーシャルワーカーの課題意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 馬場幸子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 112
3. 書名 スクールソーシャルワーク実践スタンダード 実践の質を保证するためのガイドライン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	望月 彰  (MOCHIZUKI Akira)  (40190954)	名古屋経済大学・人間生活科学部・教授    (33923)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	鈴木 庸裕 (SUZUKI Nobuhiro) (70226538)	日本福祉大学・教育・心理学部・教授  (33918)	
連携研究者	澁谷 昌史 (SHIBUYA Masashi) (80460145)	関東学院大学・社会学部・教授  (32704)	